

第3回 JAMT-JIMTEF 国際セミナーに参加して

投稿

済生会和歌山病院 丸山 美樹

【はじめに】

平成 20 年 3 月 20 日から 21 日の 2 日間の日程で第 3 回 JIMTEF-JAMT-AMTT 国際セミナーがタイ国において開催された。今回、今セミナーに参加する機会を得たのでその内容を報告する。

【JIMTEF について】

正式名称は財団法人 国際医療技術交流財団。広範な医療技術に関する技術の振興と国際交流を目的とし、主に開発途上国の「人作り」に医療技術の分野で貢献すると共に、人的交流を通じて技術移転のみならず、日本と開発途上国との相互理解を深めることを目指す団体である。主な事業の一つに今回のセミナー開催が挙げられ、その他、開発途上国からの研修員の受け入れや専門家の派遣、調査団の派遣などを行う。

【研修スケジュール】

3 月 20 日 : 09:00~17:00	セミナー参加
18:00~	意見交換会
3 月 21 日 :	終日施設見学
09:00~10:00	バンムラーナラドウン病院
10:00~11:30	国立衛生研究所 (NIH)
13:30~14:30	タイ赤十字匿名診療所
15:00~16:00	チュラロンコーン大学 医学部

【1 日目】

JIMTEF-JAMT-AMTT 国際セミナー

① 鳥インフルエンザウイルス感染症について

鳥インフルエンザ感染症の疫学、最新の研究についてチュラロンコーン大学医学部教授のヨング・ポボラワン先生から講義を受けた。

タイ国初の感染症例の提示があり、発症から死亡までの経緯やウイルスを含む検体の取り扱いについての内容に興味をそそられた。鳥から哺乳類であるトラやネコ、犬に感染が拡大し、またトラからトラなど同一の動物間内感染も確認されていることやこれらすべての感染を起こしたウイルスがコドン解析によって同じコドンを持つ H5N1 型インフルエンザであることが解明されているなど、先生の研究の成果が惜しみなく披露された。鳥インフルエンザについて、ニュースで取り上げられる機会が減ってきているためか、危機感が薄れてきていると思った。やはり、外国で発生している感染症の一つで日本に入ってくることはないと考えてしまう。先生はすぐにパンデミックを起こすと考えられないが、人に感染するタイプに変化したとき予想できないと話されていた。鳥インフルエンザに限らず、人の生命を脅かす感染症に関して対策を講じることが必要である。しかし、鳥インフルエンザは近いうちに必ずパンデミックを起こすと予想され、また死亡率も高いことから、発生を経験した国や地域からの情報をもっと集め各国の万全の対応が必要であると思われる。

② HIV 感染症の疫学と対策について

タイにおける HIV 発生の流行、予防と成果や今後の問題点について、アチャラ・テラクル先生の講義を受けた。エイズ対策委員会を設置、HIV の正しい知識を市民に与える活動を始めたタイ国の HIV 感染対策について経緯が紹介され、マスメディアを利用したキャンペーンや 10 代を対象とした研修会、職場内の AIDS プログラムなどが行われ、感染者数が激減したことに驚いた。しかし、このプロジェクトの中心となったのが政府であったことにさらに驚かされた。

日本は、先進国で唯一 HIV 感染者が上昇傾向にあり、今後の対策が重要である。現在、NGO などを中心となって VCT 活動や HIV の正しい知識を与えるパンフレットの配布などが行われているが、しっかりと HIV の正しい知識が浸透しているとは言い切れない。実際、日常生活を過ごす限り、HIV について触れる機会は一切ない。また、医療従事者であっても正しい知識を持っているか疑問である。今後、早急な対応が必要であると思われる。

タイ国では国内に薬剤が供給できるよう国家レベルのプロジェクトが行われている。新薬の開発により死亡率の低下、感染状態での生活が長くなることへの不安、高額な医療費による生活の圧迫、また、移民や不法労働者などから感染したアウトブレイクが発生しているなどの問題点をお聞きした。感染者の減少に成功している実績があり、新しい問題に対しても早急な対応が取れると考えられる。もっとタイ国の HIV 対策が、日本の予防プロジェクトに反映されればと感じた。

③ 日臨技フォトサーベイの現状と課題

日臨技主催コントロールサーベイが毎年行われているが、その中で使用されているフォトサーベイはアジア各国にも配布されている。今回、国内とアジア諸国での結果の相違点などを中心とした講義があった。日本固有の虫卵や矢印の位置による回答の変化など日本国内で用いるサーベイをそのまま海外のサーベイに使用することが難しいと感じたが、タイ国の臨床検査技師からサーベイについての質問が多く、活発なディスカッションとなった。

④ 日・タイ協力事業

日本側・タイ側からそれぞれ 1 名、JIMTEF 帰国研修員 1 名の計 3 名から、技術協力のあり方についての講義を受けた。日本側から現在の研修コースは日本での臨床検査技師受け入れが主であるが、研修コースをタイへ置き滞在費や移動に費やす時間の大幅短縮となる点を中心に今後の日本の関わりが紹介された。また、タイ国から南東アジアの中心部に位置している地理的要因からもアクセスしやすい点やタイ国内の臨床検査技師は国際的な基準で認定を受けている点、文化的背景が類似しお互いを理解することが容易であるなどが挙げられた。

次ページへ続く...